

宇佐鳥居

神社でよく見られる鳥居は、世俗的な世界から神聖な空間へ移行することを示しています。日本全国にたくさんの鳥居の形があり、宇佐神宮には宇佐鳥居という独自のスタイルがあります。その特徴は、笠木がよりドラマチックに反っていること、笠木の下にある柱の上部を囲む 2 つの黒い「輪」があることです。宇佐鳥居の 2 つの水平の梁は中央の支柱でつながっておらず、神社のネームプレートがありません。鳥居の明るい朱色は、邪悪なものや不幸からの守護を目的としています。宇佐神宮の境内にある鳥居はすべてこの様式で建てられています。

上宮の鳥居

上宮（上の社）へ続く石段の頂上にある鳥居は、宇佐鳥居のスタイルの起源とされています。「一の鳥居（一番目の鳥居）」と呼ばれることもあり、宇佐神宮の主祭神にちなんで「八幡鳥居」と呼ばれることもあります。

上宮前のこの場所に、いつ鳥居が最初に建てられたのか、分かっていませんが、1030 年の文献にはこの鳥居が登場します。現在の鳥居が建てられた年もまた不明ですが、記録によれば 1863 年に修理されているため、少なくとも 150 年前からあることになります。この上宮の鳥居は大分県の有形文化財に指定されています。

大鳥居

神橋を渡って神聖な土地に入った後に見える、宇佐神宮への表参道沿いにある大きな鳥居は、大鳥居（「大きな鳥居」）と呼ばれています。11.1 メートルの高さで、この神社で最も大きな鳥居です。

元の大鳥居は 1111 年に建てられました。17 世紀に権力者の交代があった頃、新しい領主が宇佐神宮に資金を提供したおかげで、大鳥居を修理することができました。1798 年に、古くなった大鳥居が、八幡神が最初に地上に降りたと言われる神聖な山である、近くの御許山の杉で新しく作られた大鳥居と取り替えられました。それらの過去の鳥居は、額束があり、柱の上部に特徴的な黒い「輪」が無かったため、「宇佐鳥居」に分類されるものではありませんでした。台風で以前の大鳥居が破壊された後、1937 年に現在の大鳥居が独特の宇佐鳥居の形式でコンクリートを使って建設されました。